397
459

シベリヤに於て全滅せる
田中支隊の戰闘真相

始

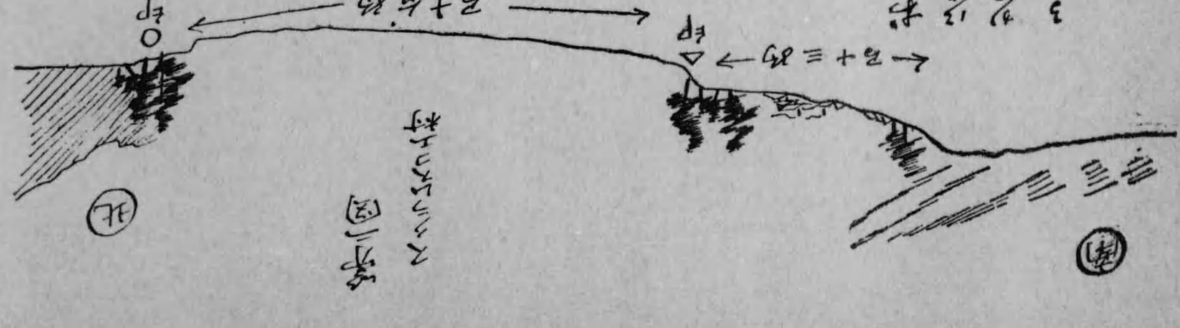
陸軍歩兵大佐田所成恭著

シベリヤに於て全滅したる

田中支隊の戰鬪眞想

二頭車以上なれば一軍を十分以内にて飛び得
長時間強行するも一時間一哩内外の速度を行
ふ容易なり

第一圖
露西亞軍用橇
冬季作戰用に
敵を味方を皆
之を用ひ



第二図
スパンが大きい

南北に長い谷間の場合は、北側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

南北に長い谷間の場合は、北側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

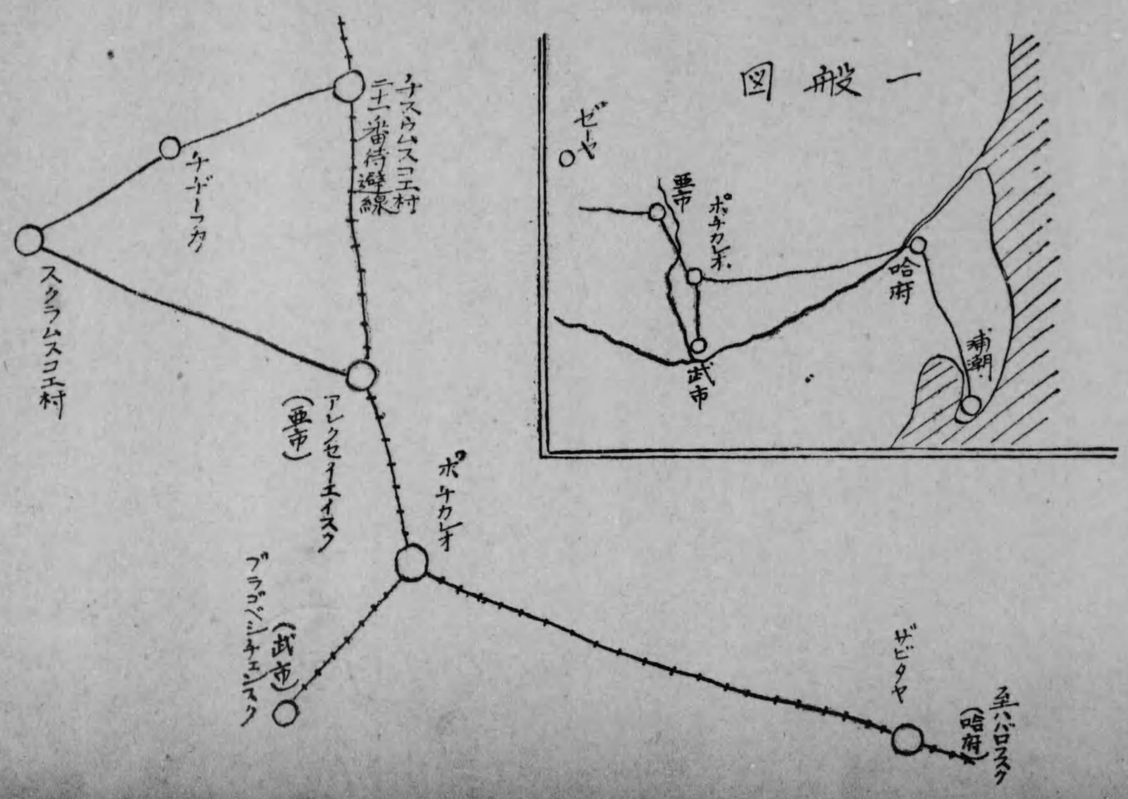
雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。

雪がつもりやすい谷間の場合は、南側の斜面が日陰になるので、雪が解けにくい。


一般図
ゼーヤ
要市
ポヤカレオ
哈府
武市
浦潮
ナスウムスコエ村
二十二番待避線
ナドーフカ
スクラムスコエ村
アレクセイエイスク
(要市)
ポヤカレオ
ブラゴベシチェンスク
(武市)
ゼビタヤ
至ハバロスク
(哈府)

397-459

序

田中支隊の全滅は戰術上失敗の全滅だ、犬死だと一部の人から誤解せられ居た爲、直屬聯隊長である田所大佐が種々の調査材料から、戰鬪眞想を發表されたのが即ち之れである。田中支隊の此の壯烈なる眞の全滅を遂げたる顚末は、泣くに泣かれぬ幾多の私情を顧みず、義の爲に貴重なる生命を捧げたる誠心、即ち大和魂なるものが誠に尊いのである。此の尊い大和魂も忠孝仁義の至誠も、所謂物質的文明の進むに從ひ漸々薄くなる傾向がある、茲に於て余は田中支隊の戰鬪眞想を廣く社會に宣傳し、國民の元氣を皷舞する一方、男子は勿論の事、女子に於いても、子弟敎育上の一大參考となり、又精神敎育上に確に効果ある事を信じ、餘暇を得ては各地の學校、青年會等で講演をなし來たつたのである。然し到底此等の方法で廣く宣傳し能はざるを以つて、今單行本となし發刊せし以所である。諸君は余の意のある所を諒とせられ、奮つて講讀されんことを希望する所である。

編輯者識

大正
12.5
文内

田中支隊の戰鬪眞想

陸軍歩兵大佐　田所成恭講演

大正七年の夏第十二師團が西伯利亞に出征し、八月二十三四日に浦潮の北方約六十里「クライエフスキー」附近に於いて敵と第一回の戰鬪を交へ、爾後二ケ月と經ぬ内約五百里奥の「ゼーヤ」金抗地帶迄を平定した。其間諸所で戰鬪はあつたけれども、夫等は敵に「飽迄日本軍の敵にして戰はふ」と云ふ腹があつての戰鬪ではなかつたのである。と云ふ譯は彼の「クライエフスキー」の戰鬪でも敵は未だ日本軍が眞に到着し居るとは思はずやつたらしい、尤も其の前に「日本軍が來た」とか「聯合軍も來る」とか云ふ情報は敵の司令部へも澤山來たけれども彼等は來るかも知れぬけれど、まさか未だ來ては居まい。日本軍の樣に見ゐるのは「チエック」が日本の軍服を貰うて居るのであらう」と斯う考へて居たとの事である。所が實際戰鬪して見ると今迄の「チエック」とは戰さ振が違ふ、愈々近寄つて顔を見ると違ふも道理、眞の日本兵であつた。そこで驚いて直ちに退却と決

め、大部分は沿海州及黑龍州の全地域に兵器彈藥を持つた儘解散し、良民に化けて日本軍の討伐を免れ、一部は遠く北方に退却し、斯くして時機の到來を待つことにしたのである。だから大正七年に於ける戰鬪は其の根本主義に於いて、敵が日本軍を目標としたものでなくて追はれて逃げられないから已むを得ず戰つたと云ふ方が寧ろ當つて居るのである。

斯くして第十二師團は上陸後僅かの間に、沿黑兩州を平定したが其の平定は表面だけのもので、浮草の中を舟を漕いだと同じ事、舳に抵抗するものはないけれども、其の代り舟の通つた後は、元の通り一面の浮草、敢て舟が通つた爲に浮草がかれた譯でない。西伯利亞の過激派も同じで彼等は抵抗をさけて一時良民を裝ふた丈の話、只斯くして時節の到來を待つ事にした許りであつた。けれども抵抗の無い以上は平定に相違無い此上何時迄も多數の兵力を駐屯せしむる必要もない譯と云ふので、年内に大行李や輜重を内地へ明けて大正八年一月からは豫後備兵を内地へ還送する事になつた。そこで各地の守備兵は或ひは半數或ひは三分の一と云ふ樣に減員される。而も頃は西伯利亞の眞冬、最も寒い時で日本軍が軍事行動に最も困難する時であるから、今此時に乘

じて旗擧をしたなら成功の望みがある、と斯う見込をつけたのが過激派の首腦連中で各地の首腦が相互に連絡して次の樣な計畫をした。即ち

先づ黑龍州武市の東方農產地を根據として主力を集め、整頓出來次第直に武市の日本守備隊を襲ふ、それと同時に武市・亞市の内部に潛む無數の過激派は内から起る。そして内外協力日本軍を驅逐する、斯くして一擧に武市と亞市とを占領すれば其の聲望に依つて全西伯利亞の過激派は一時に立つ中立の農民も必ず悉く味方に加擔する、そして其等が各々步調を揃へて全西伯利亞に分屯する日本軍守備隊を襲ふ。鐵道電信をも破壞する、さすれば日本軍は連絡も給養も出來なくなるから如何に戰さが強いと云ふても元來が少數で今更に減兵と云ふ場合だから必ず成功し得る。

右の計畫に依つて丁度日本軍が豫後備兵の歸還輸送を始める時分から著手して續々前記の場所に集合を始めた。日本守備隊には頻々と其の情報が來る二百集つた、三百集つた、五百集つた、千になつた、二千になつた、三千四千五千になつたと云ふ樣に、そこで附近の守備地から偵察隊を敵の集合地に向けた「ザビタヤ」からも出る武市からも出た各地に小戰鬪があつて遂に「アンドレッカ」の堀中佐以下の戰死と云ふ樣な出來事もあ

つた。

形勢あなどるべからず殊に武市は元來敵の根據地だから今度も其の第一目標に決まつて居る。而も我守備兵は手薄だ、此儘留まつて敵の襲來を待つて居たなら市内に充滿する過激派も立つに決つて居る。さすれば腹背敵を受ける譯、之れは寧ろ先制の利を占めて此方から進出して攻勢に出ねばならん。

と、斯く決心して武市支隊長山田少將は出發した。

敵は自分が攻擊する計畫の所を却て日本軍から攻勢に出られた。そこで元來俄か集めで團結力の堅固でない部隊で遭遇戰の勝利も覺束ない。さりとて止つて防禦せんとしても、陣地隊勢共に自信がない。一方には豫て計畫の亞市、東方集合部隊が最早や亞市を占領し得た時分だ。就ては先づ山田少將の攻擊を避け行く行く兵員を徵集しつゝ一先づ亞市に落付き同地の部隊と合した上で徐ろに次の方策を定め樣。

と決心して愴惶北行亞市に來て見ると、是亦豫算違ひで、亞市には日本守備隊が尙儼然として居る。そこで已むを得ず其の西方約十里の「スクラムスコエ」村に避けて思案を

始めた。

武市東方主力は武市攻擊の準備の出來ぬ内に却て日本軍から攻擊されて立ち遲れた。亞市は豫定の占領も出來なんだ。要するに今回の旗擧は凡て立ち遲れになつた。之れでも飽迄日本軍と對抗して戰をして見るか夫れとも速かに解散して更に時節を待つか、戰さするなら如何にしたら勝算があるか、解散するなら如何にしたら無事に解散が出來るか。やりかたを誤れば直接の危險ばかりでない將來の再擧も絶望になる、と。

山田少將は武市附近の兵を提げて討伐に出たけれども、元來の守備地には矢張り相當の兵力を殘して置かなけりや出た後を直に其地に潛んで居る過激派から占領される虞があるから、實際出かけて行く兵力は誠に僅かなもので、一中隊と云ふても漸く三十人位に過ぎない有樣、從つて山田少將の總兵力は眞に少數で迚も足らない。そこで哈府にある師團長直轄部隊も浦潮方面に在る軍司令部直轄部隊も、融通の付く限りは凡て山田少將に增援させる事になつた。歩兵第七十二聯隊の主力が四百里後方から第一線に飛び出す事になつたのも此時であつた。此等の增援部隊の第一着として汽車

で馳せつけたのが田中少佐の指揮する歩兵二中隊、機關銃隊一隊で之れが二月二十四日の午後亞市に着いた。其時丁度亞市に着いた山田少將は之に次の意味の命令を與へた。

敵の主力はスクラムスコエ附近に居るらしい、旅團の主力はあらゆる道路を利用し南方から之れを追窮するから貴官は汽車の儘北進して敵の向ふ側に出で其逃道を押へよ、そして敵を挾撃にして殲滅しよう。

逃足の早い敵だから一方から追ふ丈では、迚も捕まる見込が無い。そこで汽車で先き廻りをさせたのである。田中少佐は列車の儘北進して二十五日の早朝に亞市北方八九里の「チスムコエ」村に在る。二十一番待避線に着て、此所で下車行動の準備に着手した其の準備の第一は敵の主力が尙スクラムスコエ」に居るか、或ひは已に何れかに逃げたかの偵察である。其儘居るならば支隊は直に此所から前進すべく、若し已に北進して居るならば更に北方へ車行するを要する、即ち支隊が此所で下車するか否かは全く「スクラムスコエ」の敵情次第である。で偵察の爲に香田小隊を橇で飛ばせた。準備の第二は支隊が此所で下車して行動する爲には先づ足の仕度をせねばならぬ。といふの

はの徵傭である。なぜなら敵は悉く橇を用ひて居る、此橇は第一圖の如きもので、元來農業用のものであるけれもど敵は到る所の村落で堅固な橇達者な馬を悉く掠奪して人も荷物も凡て其れに乘せてゐる。橇には一頭曳、二頭曳、三頭曳等がある。二頭曳以上になれば一時間平均三里位行動するのは容易で、短距離の一里位なら十分以内で飛ぶであるから此の敵と戰鬪するには否でも應でも徒歩では間に合はない、殊に今は嚴寒で日本軍は凡て防寒服を着、防寒靴を穿いて居る。此防寒具が實は甚だ不完全で運動は殊に不向きだ、下から馬に乘れないのは勿論の事、僅か一尺ばかりしか高さのない橇に乘り下りするさへ容易でない位、しかも今雪は股を沒する深さだ、其れを徒歩で行軍しようものなら一時間に半里位が關の山、強て四五里も行軍し樣ものなら身體は疲れて目が眩む、バタ〳〵雪の中に倒れて、それきり動かなくなる、實際戰鬪力も何もない。

内からは汗で襦袢、靴下迄絞る樣になつて居るから、止まれば直ちに凍傷になる、其れ故に軍隊の機動の爲には是非共敵と同樣に橇を用ゐねば、誰が何と云ふても頭から喧嘩が成り立たないから仕方がない。そこで田中支隊の主力は二十五日に二十一番待避線に在つて附近の村落から橇の徵集をした。

「スクラムスコエ」の偵察に飛んだ、香田小隊約五十名は、露國將校三名の案内で午後四時頃スクラムスコエ村の北側に着た。向ふを見ると、村は第二圖の如く、小高い山の上に在る○印の林線から見ると村との間約一丁が低地、是が今は一面の雪で道も河もないけれど實つは河原である。其河原を向ふに渡つた△印迄村の外圍の柵が來てゐる。柵の外側に沿て松の樹が五六本並木の樣に在る村の大部分は山の南側にあるので、北から見れば漸く十軒程ばら〳〵と見ゐるばかりすべての家からは煙突が盛に烟を吐て居る。家の周りには澤山馬が繋がれて居る、村落内を傳令が輕騎に乘つた者が急速の歩調で往來して居る。成る程敵が居るらしい、同行の露國將校は敵が居る、危險だから早々退却を」と勸めるけれども、敵が居るにしても其れが主力が一部かを見別けなければ香田少尉は歸る譯にゆかん。所が幸にも村の北方に對しては敵が警戒兵を出して居ない、そこで香田少尉は部下の大部分を○印　松林中に伏せて置いて手兵十名はかり連れて窃に村落に接近し、河の向ふ岸の松の樹の本△印まで着た。見ると家の周りの馬、橇悉く敵のものに相違無い、家の内で露人の多勢がしやべつて居るのも聞ゐる露國將校は「確に過激派だ」と云ふ、併し村の大部は茲からも見ゐぬから、豫て聞いてゐる

約四、五十の敵が現在するのか、それとも一部が殘つて居るのか判斷が着かない。どちらかに廻つて見樣かと思ふても右も左も河原に沿ふて一望千里で、それも駄目、そこで「威力偵察をやらう」と決心した。此の巣には蜂が居るのか、それとも空巣か、見た丈では如何しても判らんから一鞭たゝいて見樣と決心したのである。蜂が居るならワーンと出て來る、居なければそれ丈け、今や此の策より外はない「ヨシ決行」と決心の刹那、松の樹の本で一發射擊した者がある、見れば同行露國將校の發射であつた。譯を聞けば

「敵の一人が家の蔭から此の方を見て、後方へ駈け出した、報告に行くと見たから猶豫は出來ぬ」

と云ふのであつた。此の銃聲に連れて家の中の敵は周章狼狽出て來た、亂射するものもあれば山の彼方へ逃げるのもある。斯くして互に火蓋を切つたが何しろ距離が僅に二三十間しか無いのだから、敵も斃したが此方も負傷者が出來た、香田少尉も肩を擊たれて血が片袖と片胸とを染めた。少尉は負傷者に大隊長への報告を命じた。

「此の村に敵が居る、主力らしい、己はも少し偵察して歸るから之れ丈け直ちに大隊長へ報告せよ」

部下は小隊長の身を氣遣ふた。

「氣遣ふな直に後から歸る」

負傷者四名は後髪引かれ乍らも後方森林に退き槎に乘つて大隊長への許へと飛んだ山の彼方側で此の村の中央に小學校がある。敵の主腦連は此の時此の小學校で會議中であつた。戰鬪を續けるか、斷然解散するか、續けるなら如何な方法で解散するならどんな方法でと、議論百出の眞最中に村の北端で射擊が始まつた。最初は先刻渡した機關銃の試驗射擊だと思うて居た所が左樣でないらしい。追々猛烈になる、其の內バタ〳〵逃げて來る奴がある「何か」と問へば「日本軍の來襲だ」と云ふ、スワコソと直ちに警急集合をした。手近の一部隊を村の北端に出して防禦させる。次に集合の出來た部隊を其左右の高地續きに出す、後から〳〵と同樣に區處した、其內に日本軍が少數で後續部隊の無い事も判つた。そこで手あきの部隊を後方へ〳〵と迂回させ、包圍させた香田少尉は一旦敵が逃げたと見る內に再び出て來る、其他村內の混雜も明かに察せらる。そこで確に敵の主力が此村に居ると判斷が著た「ヨシ退却」と決めて「後へ」の號令をして後を見ると、先に○印に殘した小隊の殘部を分隊長が連れて駈足で、河原を前進し

來りつゝ、早や二十間ばかり後方に在る、分隊長は先刻歸した負傷兵から小隊長負傷の事を聞き、又銃聲が劇しいので「捨てゝは置けん」と飛んで來たものらしい。少尉は手を擧げて

「大丈夫〳〵、心配無用、兎に角後の森林迄」

と命じた、小隊は直に廻れ右前へ駈足をして少尉の手兵も共に駈足をしたけれども、雪は股迄ある、防寒服は着てゐる、何分にも思ふ樣に動けぬ、轉んだり起きたり、其間敵は後から亂射する、一人傷つき二人倒れ森林に著く迄に二十一名の負傷者が出來た。他の二十餘名はやつと○印森林迄漕ぎつけたけれども、何分何十倍の多勢だから後方から射擊するものゝ外に例の槎で遠く側方から我退路の先へ〳〵と迂回する、見れば最早四面皆敵である。

一方の血路を開いて逃げられぬでもあるまい、さりながら戰友の半數は已に雪の河原に斃れて居る、其れを見殺に捨てゝ自分等ばかりが逃げるは情に忍びぬ、不分充なから先刻返した負傷兵に依つて大略の敵情報告も出來た、同行の露國將校一名は松の樹の根で斃れたが他の二名は見にぬ、軍曹から聞けば「先刻只つた一つ殘つて居た

橇に乗つて待避線の方へと飛んだ」と云ふ。さすれば彼等も大隊長への報告はして呉れるに相違無い、今は是迄だ、此仲間の一人でもある間は敵を殺せる丈殺して共に枕を並べ様。

と決心した、撃つた〳〵彈の續く限りは撃つたが元々多勢に無勢で答は決まつて居る一人へ減り二人減り、遂に小隊長は眞中に圏形になつて、二十幾名斯くして香田小隊は「スクラムスコエ」村北側の雪の上に全滅した。

田中少佐は二十五日夕迄に支隊に必要の橇を徴發し得て何時でも行動の出來る準備を完成した。

さるにても香田少尉は如何したろ、山の雪路七里とは云ひながら、モー何とか情報のある時分、無事であれ、恙なかれ。

と祈りつゝ二十一番待避線の列車中で心配して居ると、夜の九時頃、彼と同行した露國將校二名が息せき駈返つた。其報告は

香田少隊は「スクラムスコエ」で斯く〳〵、香田少尉は最初に負傷したが片袖血に染みて勇氣益々倍して居た。自分等は早く退却をと勸めたが「主力か否かを確めぬ内は」

とて聞かなんだ、小隊は或は全滅されたかも知れん云々。

さてこそ

敵の主力の在所は知れた。我が行進目標は決つた、南方よりする旅團主力も今頃は「スクラムスコエ」に到着の時分、殊に香田が危いと聞く上は一刻も猶豫ならず。

と直に警急集合を命じ、明日をも待たず出發する事にした。そして此の事を亞市の山田少將に報告し、夜の十一時過、前の露國將校二名を道案内にして二十一番待避線を出發した。零下四十度の雪の夜路を勇みに勇んで橇を叱しつゝ其出發前に香田少尉が歸した負傷兵四名も歸つたが報告は同じ事實四名中の一人は哀れ途中で息が絶えた。

二十一番待避線より西へ進む事一里半で一部落がある。舊名「チデーフカ」新名「ユフタ」と云ふ。支隊は此處で三時間ばかり休憩して朝食した。是が此世の食事の仕納めだつた「スクラムスコエ」の危急一刻も猶豫ならずと、夜中に飛び出した支隊が途中で三時間の大休止は受取れぬと云ふ人が内地にあるが、それは西伯利亞の冬の野外を知らぬからである。何しろ彼の寒さで炊き立の飯を飯盒に入れ、羅紗やネル」の樣な毛織物で包み其れを毛皮胴着の下に携帶しても、其の間無事じやが、野外でそれを取り出せば、包を

とき蓋を開けると同時に一瞬間に上表が眞白に凍る、凍つて箸を持てぬ手で無器用に匙や肉叉を鷲掴で差込み、一塊り載せて口に持つて來る途中で飯粒は心迄凍る、口に著けた時は、カチ割氷を喰ふが如く、カチ〳〵と音がして、チュッと解ける、齒にしみ腹の底迄冷ゐ渡る、迚も食へたものぢやない。露西亞の生麵麭を持つても見たが、之れも心まで凍つて岩の如く、齒も立たねば碎く事も出來ない。だから冬の西伯利亞では誰が何と云ふても食事の爲には大休止をして火を焚き飯盒を丸燒にし、生麵麭を丸燒にし、其の熱いのを食ふより仕方が無い。之れが爲には是非三時間を要するのである。「チバーフカ」の大休止三時間、田中少佐としては隨分氣がせけたらうと思ふけれども、是非が無い、斯うして支隊は拂曉に「チヂーフカ」を出發した。永野小隊を前衛、他を本隊として敵は二十五日夕、香田小隊を殲滅して「マア善かつた」と再び元の宿舍に入つたが、其後續々來る情報で愈々旅團主力が南方から迫つて來る事を知つた。其儘此處に長居は危いので夜中の二時に出發して二十一番待避線の方向に逃げた。元より田中支隊が其路を進みつゝあるのを知つてゞはない。若しスクラムスコエから北へ動けば、そちらは山地々帶で村落が少ない。あつても寒村ばかり、物質が無くて給養に困る。敵は凡

て到る處で糧秣物質其他凡ての必要品を掠奪して使ふのであるから、地方が農產地で且つ富んだ所でなくば困る。そこで

此處から手近の農產地と云へば亞市の東方地區であるが、近路の亞市方面には目下日本軍が充滿して居るから、そちらは通れない、そこで二十一番待避線の方から迂回して彼の農產地に逃げ込まう。

と計畫したのである。そこで偶然にも同じ路を田中支隊と相對して互に進む事になつた。

夜が明けて間も無く午前六時頃に双方の前衛は「チバーフカ」西方約一里の森林中で遭遇した。永野少尉は直に小隊に下橇させた散開し射擊を開始した敵も同樣永野小隊に續いて田中支隊本隊も直に下橇して戰鬪準備を完了した。敵の前衛は瞬く間に潰亂して再び橇に乘つて逃げ、其の本隊の先頭に雪崩れかゝつた。永野小隊は直に追擊に移つた。本隊も之に續いたが、悲しい事には我支隊の橇は總て露民の傭役であるから、一度彈が飛び始め軍隊が下橇するや、モー今日の給料よりも命が大事だし、殊に日本軍に御奉公した此面體を若しや敵に見られたら、後日の復讐が恐ろしいし、十人や二十

人の橇の監視兵の制止など聞かばこそ、皆一齊に馬の頭を立て直し一目散に我居村に向つて早馳逸走、折角敵の前衛を打ち破つた勢で、早く追擊を　思つても最早や全部が徒歩だし、雪は深し身には防寒服、心は如何に逸つても體が動かぬ、遺憾千萬、予は常に思ふ事であるが彼の戰鬪が若し嚴寒でなかつたなら、田中支隊は必ず數十倍の敵を潰亂させて、非常な殊勳を立てたに相違ない。元來遭遇戰と云ふものは最初の火蓋が大切で若しも其れに敗けたら幾倍の兵力を後方に持つて居ても、敗れた味方が我が銃先きに、雪崩て來るから射擊は出來ず助け樣が無い、結局本隊自身迄が潰亂の渦に卷き込まるより仕方がない。　古來の戰例皆然りで、現に普墺戰の時に伊太利戰場で、墺の騎兵百騎ばかりで、伊の歩兵旅團を先頭から後備まで蹂躙した例もある位だ。　然るに今日に限つては敵は橇味方は徒歩、逃げる兎を龜が追ふと同じ事、見る〳〵敵を逃した。　殘念千萬ながら齒がみしても及ばぬ。

後で敵の指揮官の話しに

彼の時自分は本隊の先頭に居たが、前方前衛で銃聲が始まつたと思ふ間に、早や我が前衛が退走して來て本隊の先頭に雪崩かゝる爲に、本隊も早や潰走に陷らん氣色、こ

は一大事自分先頭に立つて勵聲叱咤、儘よ逃げて來る奴は味方でも擊ち殺せ」と嚴命した。　そして無理鑓に本隊先頭の一部隊を正面に展開し、日本軍の追擊に對抗させたが、幸ひにも日本軍の前進は思ふたより遲く來た。

と、その遲く來たのは前記の理由、卽ち味方の不運敵の僥倖だつたのである。

此戰鬪を敵が最初から計畫して、主力を以て路の兩側に伏兵とし、小兵力を以つて敗けた振して伏兵の間に釣り込み、時を計つた伏兵が俄に現はれ、一瞬間に田中支隊を殲滅でもした樣な邪推した連中であつたけれども全く以つてそんな次第じやない。　敵の前衛は眞に〳〵眞劍に潰走したのであつた事は敵の指揮官が證言して居るのである斯くしてやつとの事で本隊の先頭で形勢を挽き回した、敵は其本隊の七分を左に、三分を右に區處して逐次戰線を擴張した。　田中支隊の兵力は百五十、敵は戰鬪員丈けでも少くも千五百を下らぬ何しろ十數倍であるから、殺しても〳〵新手を差換へ結局包圍を成功した。

田中大隊は追擊に當り右翼の小高い高地に渡部茂吉軍曹以下十二名を上げた。　此の高地の如き敵の指揮官が其の直ぐ前五、六十間前の高地迄來て居て「該高地を速かに奪

取せよと頻りに激勵し、數百の兵を向けたに不拘三時間を費して渡部軍曹以下を全滅した後に漸く占領して居る實に骨が折れた」と話してゐた。

斯くして田中大隊は惡戰苦鬪約六時間旅團主力は遂に敵の背後に現れず、其經過中多勢に無勢敵は殺しても豫備がある。後に「チヂーフカ村小學校に集めてあつた敵の死體丈けでも二百以上あつた位味方は最初から全兵力百五十、一人滅り二人滅り終に一人もなくなつた。全滅した。

其の勇戰の有樣は後で親しく此戰場を視察した者誰でも敬服せぬ者はない。立樹に中つて居る敵の彈は右側方又は後方のものが多い、死骸は樹木の右側にあるのが普通であるのに此の時の死者に限つて死骸は皆左側にあつた。で見ても敵の彈は横と後から來た事が判る。

戰場の經驗者は誰でも知つて居るが、側方殊に後から擊たるゝ位厭なものはない。斯ふなると兎角部隊は志氣沮喪して潰亂に陷り勝ちのものである。然るに此の支隊には潰亂者が一人もない。機關銃の如きも打殼が山をなして居た、小銃彈の打殼も然りであつた。野外に止まる事數分間でも指も凍り落ちる寒さの中を、揃ひも揃ひよくあ

れだけ射擊を續けたものだと驚歎する外はない。最後の一人まで皆立派な戰鬪をして居る。大隊旗手三木軍曹の如き敵に渡すまいとて既に數彈を食つて居る、大隊旗の桿を脫して旗を引き裂きそれを雪に埋めて其上に死んで居た。田中少佐は胸部の貫通銃創に氣絶もせず勇敢な指揮を續けて部下の最後を見屆けた後不自由で凍へた手で見事に咽喉をかき切つて果てゝ居た。其他下士卒も後に捕虜が

自分は三年も歐洲戰線を往來したけれども此度の日本軍の樣な戰鬪振は嘗て見た事が無い。日本軍は怪我をするほど人數が減るほど益々強くなつて只一人になつてもまだ四方から群がる十數名を引受けて格鬪する、彼の寧ろ亂暴の有樣は常識をはづれて居るから何とも批評の言葉がない。

と驚歎して居たのを見ても最後の一人まで、どれもこれも勇猛果敢、沈著、剛膽に奮鬪し從容自若死に就た事が想像される。

如斯にして田中支隊が終に一人の生還者も無く全滅したに反し道案内をした露國將校二名は何時戰場を脫したものか午後二時頃再び二十一番待避線へ歸つて來た。其處には昨日亞市附近に殘留した田中支隊の一部西川砲兵中隊〔二門〕と其の護衛の森山

歩兵小隊が居た。西川大尉等は右露國將校から田中支隊主力の危急を聞いた敵情が心許ないから若し二十一番待避線に到着した時に已に田中大隊が其地に居なかつたら獨で山地に入らぬがよいと注意されてゐたのであるけれども、今我支隊主力の此危急を聞いては最早打捨てゝは置けぬで、直に出發した。橇を傭ふ暇がないから歩兵は徒歩で先頭に砲兵は續いて其總兵力は僅に百二十名。

敵は田中支隊を全滅して「マー仕合セ」と「チヾーフカ」村に入つて晝食をして居た所が斥候から報告が來た。

別に日本軍が前進して來る。今朝程の兵力は無いが砲兵はある。

「ヨシ」と云ふので敵は直に警急集合して二た並びに陣形を立てゝ前進した。「何所でも日本軍と遭遇したら先頭は直に正面戰鬪を始める。後方の部隊は逐次右と左へ延伸增加して日本軍を包圍する」と斯う云ふ部署を定めて、此の敵と西川中隊とは二十一番待避の西方約半里の山中で出會した。森山歩兵小隊は直に戰鬪を始めた砲兵も直に陣地を占めた。然し起伏地で且森林であるから、砲兵射擊界は甚だ充分でない。敵は漸次地形を利用して左右に迂回增加して來る。約二時間の後には四面悉く敵となつた、其内に敵の主力は我砲兵の左後方から先づ段列を襲つた。茲に二十六頭の馬の死體があつた。其雲霞敵に直に我砲兵に迫つた、砲兵は後方に砲口を向けて猛射した殺しても〳〵敵は幾らでも代りがある。砲兵中隊を取圍んで小銃を亂射した。西川大尉以下皆砲車を中心に圓形になつて全滅した森山小隊は前面及側面の敵に當つて居た。中尉は早く已に股に貫通銃創を受け「タオル」で自分で繃帶して帶革に吊りあげ死者の銃と彈藥を以て兵卒と共に射擊戰鬪をして居たが、前後左右の敵は殺ろしても〳〵增加するばかり、其の内に砲兵は後方から襲はれて全滅した。歩兵小隊も今は早や中尉と從卒と外一人のみ最早我事終れりと最後の三人銃劍を揮うて敵中に突入した、三人の死體は折り重つて道路の左側十米突程の稍々右斜に傾いた樹の下に在つた西川砲兵中隊も森山小隊も斯樣に全滅した。尤も右の從卒は翌日助けられて蘇生した、其他此小隊には助けられて後で蘇生した者四、五名あるが其等も皆一度死なゝんだ者はなかつたのである。

以上述べた如くで田中支隊は三ケ所に別れて同じ敵と戰鬪し、三ケ所とも一人たりとも逃げ隱れた者無く眞の全滅を遂げたのである。斯の如き眞の全滅が古今東西を通

じて外に例があるであらうか。三ケ所とも戰鬪が相當劇烈になつて後に、同行の露國將校は戰場を脱して歸還したのに、我士卒に限つて一人も逃げ隱れた者がない。若し潰走して各個に活路を求めたなら、或ひは指揮官が各個退却を命じたなら、必ず其内の若干は助かつたに相違無いけれども指揮官も解散を命せず、各自も一人として潰走した者がない。そこが日本武士の尊い所である。個人の人情から云へば死に度くないのは當然である。如何なる家庭でも如何なる人でも死んで悲しまぬ者はない。特更死んだ後の悲慘で見るに堪へないものも尠く無い。其等の人の數時間の戰鬪中其死後を思ふては隨分死ぬるのがつらかつたらうと思はれる。彼の戰爭歸りの高名談に「戰場必死の場合、日本武士は家郷の事など思はぬ」などゝ云ふ人があるけれども、私は決してそんなものでないと斷言する。出征したからとて無暗に死ぬるが忠義と云ふ譯じやない。又必ず死ぬるものとは限らん、だから出征者の頭は啻に生きたり死んだり所謂生死の兩界を往來してゐるものである。若し武運强く無事凱旋したら親兄弟が如何に喜ぶか、自分も如何に嬉しいか、其時は彼して斯うしてとそれを想像するのが陣中無上の歡樂であるから今日の戰ひで愈々戰死と覺悟すれば誰でも一度は必ず若しや

と思ふたけれど、それは絶望、何れあの世で御目にかゝります。御兩親樣も其外も皆御無事で」と祈る心地がするものである。忠も孝も本は同じ情じやもの、忠に厚い者が孝に薄い筈がない。此の世の別れを惜むは當然だ。此の場合に彼の戰爭歸りの高名談に云ふ如く、果して眞に一度も家郷の事を思ひ出さぬ人があつたとすれば、予は其人を賴母敷くない人、上官としても戰友としても部下としても望ましくない人だと思ふ。

予の理想は

如何なる危險の場合に處しても決して逆上せず、夢中にもならず、親子兄弟に會ひたいと云ふ情は充分に有つて燃るが如く强く、去りながらそれは人情、今死ぬるのは大義だ」と覺悟して、惜しまずに命を捨てるだけの修養した人であり度い。

と、云ふのである自分は聯隊の練成に常に此主義で居たから若し此主義の如く練成が出來て居たとすれば、彼等將卒三百は必ず其戰鬪中家郷の事も考へ其情に於ては忍びがたいものあつて、而も其情を抑へて

今日は死なねばならぬ、一人逃げても我帝國軍の威信は地に墜る、帝國軍の威信は卽ち帝國軍の威信であるそれを落してはならぬ、落すものか己は立派に死ぬ。

と、斯く決心してくれたに相違ないと思ふ其決心の尊さは如何ばかりか、然し其尊い決心も六時間の長い間には絶ねず情の煩惱から「逃げろ〳〵」とそゝのかされる前への敵と心中の敵と併戰すること六時間終に此の二つの強敵に打ち勝つて立派な最後を遂げたのである、其尊さは迚も口では云はれない又其味は、自分戰場で生死の巷に立つた者でなければ想像が出來ないことなのである、予は死者とは親子の關係がある、肉身には及ぶまいが矢張り親子の情もある「克く死んで呉れた」と感謝すると共に、其各自の胸中を察して武士に不覺の涙も出る、實際其死後の事に就いては後髪を引かれたであらう死に度なかつたらうと想像されるのも隨分多いものを、今知つて居る一部分に就て云ふても機關銃隊長林大尉の如き、先代が日清戰爭に滿洲で死なれた爲に未亡人が千辛萬苦して兒二人を育てた、漸く一人前に成人させたと思へば長子は病死、殘るは現在の林大尉一人だ、其林大尉が今死ぬると決まつた時、大尉本人の私情は特に老母堂の心中を思ふてどんなであつたらうか、二代續いて靖國神社に祀らるゝは勿論家門の光榮であるけれども、老母は短き人間一生の間に二度軍人遺族となつたのだものを、察せずには居られない、又同隊の和田曹長の如き、内には老母只一人である、是が又孝行者で、滿期

の上は家を新築して母を喜ばせ度いと節儉して貯金四百圓からを持つてゐた、常に老母の噂をして氣遣ふて居た、それが孝行の志を果さず今日死なねばならぬことになつた心の中は如何ばかりであつたらうか、又衞藤曹長は出征の年の春、老父が死んで母一人頻りに心細がつて西京の本願寺參りをしたがる、曹長は「さらば連れて」と中隊長の許可を得て自分の貯金を下げ、休暇も許され愈々出發と云ふ間際になつて動員下令萬事中止で出征した、戰地で度々それが「殘念だつた」と話し「若し武運强く無事に歸らば老母を西京へ、桃山へ」と樂しんで居た、此の本人が今日の戰で死ぬると決まつた、其心中如何であつたらうか、又宮崎縣西臼杵郡七折村の工藤佐之助と云ふ上等兵がある、養父母に育てられて模範青年で筏乘を業とした、彼等仲間の食事は河岸の飲食店にあがり一酌するのが普通である、けれども佐之助に限つて一度も飲食店に上つた事がない、必ず家から握飯を持ち雨が降らうが、風が吹かうが岸の岩に腰掛けて冷た飯を川の水で食つて辛棒した、そして入營前に七拾餘圓の貯金をして居た、所が本人は入營の時其金の處分を一言も養父に告げなかつた、養父母も義理ある仲だから尋ねて心配させるのもと思つて一言も尋ねぬ、其儘入營したが其後も兩親は時々「あの金を如何したらうか」と噂

をして居た所が其後二ヶ月ばかりしてから其金を養母が偶然にも長持の底から發見した添へた手紙の意味は

私は今帝國の軍人になつたから何時變事があつて戰場に行き戰死せんとも限らぬ若しそんな場合があつたら葬式金が入るから此金をそれに當て下され度い兩親に之を云はずに來たのは心配させまい爲で御兩親が私の留守中に御使ひなさるのを恐れた譯じやないから惡く思うて下さるな萬一差迫つた入用があつたなら使つて下すつて差閊無い若し又私が無事に滿期歸鄉したなら此金を土臺に更に勉强して財産を造り御兩親に安樂をさせます云々

で「義理ある仲で」と兩親を泣かせた其後又戰地から豫備兵の歸還に託して現金拾圓送り屆けて來た其手紙には

此の金は不正の金ではないから安心して御使ひ下さい討伐や守備や多忙のため御上から頂戴した金を使ふ暇もなくて貯つたお金だ私は戰地へ來た御蔭で無上の修養が出來た人は忙しくて暇が無ければ金は貯る、だから私が若し武運强く凱旋が出來たなら晝夜兼行で働かうと思ふ、さすれば收入は增す、使はないから減りもせぬ一

擧兩得になる此一擧兩得で家を起せば何時迄も御兩親を今の貧に泣かせる事もあるまい

「血を分けた仲でも無いのに斯くまで孝行をして呉れるか」と又兩親を泣かせた此の立派な志操の佐之助が將來の自信ある成功も、希望する孝行も果さず今日の戰に死ぬると決つた時其心中如何だつたらうか

又大分兵營前に安部上等兵の遺族がある、その佛檀の位牌の側に二三寸の露西亞の人形があるが此人形が又涙の種である、上等兵は夫婦の間に出征後長女が產れた、妻から通信の度毎に子供が大きくなつた笑ひ出した前齒がはへた」などと樣子を認めてある親の情見たくてたまらんが今はかなはん併し何時かは還る事もあるだらう、其の時の土產にと彼の地で此人形を買ふたので、箱に「長女誰への凱旋土產何月何日何地に於て之を買ふ又助」と書いてある、此の上等兵は一月より二月に亘り豫後備兵歸還に當り宿舍係として浦潮に勤務したから、若し此人形を友人に託して送つたら確かな幸便は幾らもあつたのであるけれども他人樣の手から與へ度く無いのは親の情であある、まさか一ヶ月後に全滅され樣とは神ならぬ身の夢にも思はぬ、半年後か一年後か何れ歸る

時が來る、其時にこそ自分が持つて歸り初めて見る我兒を抱いて遣り「オオこんなに成人したか父を知つて居るか、サア之が土産だ、夫れかうして御覽、泣くだらう」と自分が手渡して如何に我子が喜ぶか其の顏を見たさに幸便にも託せず其儘背嚢に入れて負つて居た、其本人が愈々今日義の爲死ぬると決まつた時其心中如何に斯ふなる位ひならあの時に誰君に賴めば、今頃迄には喜んだとか泣いたとか返事も來て居る時分だのにそれも出來ず今死んで此の人形を我死骸と共に燒き捨てるのが、如何にも惜しや殘念やと思ふたに相違あるまい、又大分市外白木に老伯母に養はれた好青年で、若き妻と二歳の男子と四歳の女子とを遺した安部伍長がある、男の子は何も知らぬが四歳の女子は父が死亡して最早や再び歸らぬ事を十分承知して居て何時も祖母や母を泣かせて居る、兵營の近所だから軍隊は度々白木を通る其度に女兒は云ふ

お婆さん兵隊さんが又來たよ、離れて見る父さんは居らん、お父さんは戰死したのだから、けれど少し離れて見るとどれもこれも皆お父さんの樣に見ねるね

と、先日も此の兒が祖母と共に陸軍墓地へお參りに來て女子は父の墓標に手を懸けて

頻りに「お父さん〳〵」と呼んで居る、勿論返事のある筈はない

お婆さん私が幾ら呼んでもお父さんは返事せんよ、お父さんは私が嫌ひなのか知らん死んだんだから還らんでも仕方がないけれども、私が此所まで來て「お父さん」と呼んだらアイヨと只つた一言返事位したつてヨサ相なもんじや無いか、ねーお婆さん

と怨みては〳〵又「お父さん」と墓に手をかけて呼び續けて居る、祖母は何とも言葉が無く只泣くばかり、側で見てゐる自分も子を抱いて共に泣くより外に詮術が無かつた、此兒此老人を遺して死ぬる本人の心持如何であつたらうか、斯の樣な個人的人情から見て悲慘な涙談は實際枚擧に遑ない程である

其他職責上から云ふても、田中少佐の如き予より一日遲れ出發をしたが、其朝予の宅の妻に告別に來て、豫て心安い間であるから、平常の通りものを云ふて後殊更に姿勢を正し言葉を改めて

田中勝輔が出發に臨み特に聯隊長の奥樣に一言申し上げます、只今より軍旗の御供をして出征しますが聯隊長の直接隷下に行動する場合の事は心配はありません、只萬一勝輔が獨立して或る任務に從事する場合があつても決して軍旗の名を汚し聯

隊長の御顏に泥を塗る樣な行動は致しません、若し又不幸にして部下の多數を殺す場合があらば、部下ばかりは殺しません、勝輔も共に死んで來ますから何卒御安神して下さい

と、云ふた由である、田中少佐は其言葉の如く上陸後直に聯隊から獨立して「ゼーヤ」の奥迄討伐し哈府を守備し最後に「ユフタ」で壯烈無比の戰死を遂げた、そして軍旗の名を汚し聯隊長の顏に泥を塗るどころか其立派な戰鬪の爲に聯隊旗の光を世界に輝かし、又折角出征しながら何事もなす機會を得なかつた聯隊の生存者をして其袖の下に陰れて生きて再び鄕土を踏ましめたのみならず又其言葉の如く部下の多數と共に自分も見事に死んだ、此田中少佐が最後まで胸中如何に職責上の苦心をしたか、最初の間だこそ一人二人と死傷する毎に

「アッ誰がやられた、彼は親一人子一人だつたのに可哀想に」

「アッ又林大尉が老母堂の心中如何に」

など心細さと共に人の哀れを思ふたに過ぎないが、併し大勢己に定まつた後は此戰鬪中敵の後方に旅團主力が進出せぬ上は最後の一人も殘らず戰死と問題の答は決定して居る、今が今まで雲霞の敵に對し骨も凍る雪の中に、親子兄弟を振り捨てゝ勇敢に働いて呉れた部下は皆枕を併べて動かず無くなつた。

あゝ彼等は皆鄕里には親兄弟がある、妻子のあるものも澤山ある、其等は夜も晝も現在の今が今も神樣に佛樣に祈願して武運長久無事凱旋を祈つてゐる、それを自分が指揮して今日此處で死なせた、最早や永久に歸らぬ其遺族は昨夜どんな夢を見たか今日の音信を何と聞くであらうか、歎くであらうか、悲しむであらうか、敵らしい敵と戰させて殺すならまだしも、破れ衣物に垢だらけ、一目見ても唾を吐きたくなる不潔なる乞食の樣な過激派を敵として此の可愛子を死なせた無念であらう、可愛想に御上に對し奉つても申譯が無い、陛下の股肱三百を昨日と今日とで自分が殺す、恐懼に堪へぬ、近くは聯隊長も豫後備兵の還送以來いつも守留兵の不足を歎じて居たが、今二中隊聯隊の六分の一を皆殺しにする、差當り此後の勤務にも困るだらう、彼れを思ひ之を思へば義と情に此の胸が張り裂ける、只一思に死んで此苦痛が逃れ度ひ、が自分は部下を持つ以上死んで自分の苦しみを免れる譯に行かぬ、一人でも部下の生きて居る間は自分も生きて居て其最後を見屆てやらねばならぬ、先刻擊れた此の胸の傷、それ一發で絶ねなかつた

のは未だ我が武運の盡きなかつたのであらう、右翼の方で今一人勇敢に戰鬪して居るのは誰か知ら、オー第十中隊の誰だ難有い奴じや、此の期に及んでも未だ射擊して居るアッとう〳〵やられたか、彼の左翼のは誰か、オ第十一の誰上等兵だ、此間迄本部の傳令で居た、確か内には八十の祖母一人だと云ふてゐたが、あゝ可愛相に、それを振り捨てあの戰鬪振難有い心底だ、仇には思はぬぞ、茲から己が見てゐるぞ、アッやられたか、もうないか、彼の樹の根に今一人居る、誰か知ら、オー誰軍曹だ感謝〳〵と最後まで部下の戰鬪振を見屆け結局

最早全部死んだ、銃聲は敵のばかり、愈々今は我事終れり一人の生還なくとも此の戰況は何時かは國民にも世界にも了解されるだらう、其時國民の元氣を鼓舞する資けにもならう、又直接には敵の肝に確かに或るものを刻みつけた部下三百を死なせたが滿更犬死させたではない、旅團主力は遂に來なんだ今更來ても我は部下と共に行く、いざ之れまで。

と已に胸が射貫かれた不自由な體で、凍つた手で軍刀を逆手に　陛下の萬歳を只一口自ら喉笛を見事にかききり松の樹の根に斃れて壯烈無比の最後、戰鬪開始の最初から

も自分から恥ぢ敬服する樣になり、世人も啻に日本同胞のみでなく外國人迄も驚歎する、萬民の崇敬は期せずして彼の將卒三百の後を追ふ樣になつた。

大分陸軍墓地には四時香花の斷ゆる間がなく、大分日々新聞社の發企で、零細の寄附金を集めて墓地に吉野櫻を植ゑた時の如き、或は小學生徒或は商店の小僧さん等が競爭する樣な寄附金を持ち込んで豫定期日以内に豫定金額を越して締切りをせねばならぬ事になり、最後の豫備隊の積りで時期を待つて居た有力者の方は却つて金を受取つて貰ふ事が出來なかつたと云ふ樣な有樣だつた、縣知事や舊藩主の人達が發企して田中支隊の勇戰記念碑を大分に建てる内議もあるらしいが、是も公然發表されたら直に十萬や二十萬の金は全國から集まるだらうと思ふ、隨分遠方の縣から「若しそんな企てがあるなら知らしてくれ義捐したいから」と申込んで來た向も少なくないから。　先頃上原參謀總長や菊地教育總監部本部長も墓地に參詣せられて「此の大分墓地は國民志氣鼓舞の上に忠臣藏と同じだから東京の泉岳寺、大分の陸軍墓地と云ふ樣に當地方に來るものは皆茲に參詣する樣に導き度い」と希望も述べられた、又先頃は別府に御成りの閑院宮殿下も特に御附武官を此墓地に御差遣下さつた、此等の語を遠くから傳承し

此時まで約六時間其六時間の長時間田中少佐の胸中を往來した樣々の苦悶如何であつたらうか。

斯くして要するに田中支隊の全員は情に打ち勝ち義を立てゝ一人の生還者無く全滅した一人の生還者も無い爲に當時戰況が不明だつた、爲に世人から色々と邪推をされ誤解せられ、失策の全滅だの犬死だのと噂もせられた、苟も日本軍隊たる者が過激派如き烏合の衆相手にして、眞の全滅をしたのであるから斯く誤解されたのも、あながち無理とは怨まぬ、がしかし事實は右の通り實に壯烈無比の戰鬪で、それこそ鬼神をも泣かしむるもので、皆立派な護國の神樣となつたのであるから、死人こそ、何事も語らぬけれども、天が人をして云はしめて其儘に葬らぬ戰跡を實査した者には誰にも成程と悟らせる、其後更に敵の總指揮官「ドロゴシエフスキー」が我が國軍の手に落ちて、其れを調べて見ると、豫て諸材料から判斷して戰況は斯く〳〵であつたらうと思ふて居た事と悉く符合する、戰場の事は凡て咄嗟の間の處置であるから何の戰鬪でも、後で調査すると必ず多少の「ボロ」は出るものであるに、田中支隊のに限つて調べれば調べる程、事實が明瞭になればなる程無缺點に立派になつて來る、と云ふ有樣で先に邪推や誤解した連中

た丈けでも管內青年は「男子は死ぬるなら戰死に限る」との感を持つ樣になり、却つて徵兵を志願する樣になつた、況して一度此の靈地に足を入れた者は、其の香煙の間に並び立つ三百基の墓標を見ると、一種云ふべからざる强い靈氣に打たれる、茲ばかりは所謂浮世の輕薄風も崇金風も全く吹かぬ、神聖侵すべからざるものがある、大分に日本の靈地が一つ出來た譯で、三百の勇士は此の靈地に安眠し護國の强い力を收めて居るのである。

終りに望み更に一言し度いのは、田中少佐以下が義を捨てれば確かに助かる道もあるものを。情を忍び義に從ひ枕を並べて死んだのが是如く誠に尊い。ではあるが其尊い心なるものは決して軍隊ばかりで造つたのではない、生れて二十歲迄地方で育つたものが已に出來損じて居たらなか〳〵軍隊教育の一年や二年で矯正し得るもので無い、即ち彼の尊い精神は所謂我國傳來の大和魂で母親の腹の中に在る內から植ゑられて懷の中から培はれ、家庭、小學校、青年會、地方で愈々益々練りあげられた結果である、だから田中支隊の壯烈なる最後の光榮は獨り死者や聯隊のみが專有すべきもので無く此人を出した地方、大にしては國民全般が分つべき光榮である、所が此の尊き大和魂も

忠孝仁義の至誠も、所謂物質的文明の進むに從ひ漸々と薄くなる傾向がある、若し之れが薄くならうものなら、日本の日本たる眞の特色が消ねたのであるから、吾人は右の光榮を分ち感ずると共に、益々國民互に大和魂を相勵んで、少しも薄ぐ事の無い樣に努力せねばならぬのである、私は常に思ふ、大和魂の如きものは倫理や理窟で養成しては行かぬ、理窟で敎へられたものは理窟でまぜ返せば直にぐら付くそれでは徒自である、理窟も何もない、只自然の觀念堅い信仰でなければならぬ、其れが爲には子供の育てかたが大事、母の腹に在る內から赤ン坊の時から親たるもの長たるものが自己の信仰に依て子供を感化せねばならぬ、死んだ森山大尉の如き實に此種の人物であつた、只だ一人の愛男光君が未だ碌々口もきけぬ內から毎朝東窓から天皇陛下萬歲と高唱させるのを日課にしてゐた、外見じやない、家庭の凡てが皆此主義だつた、其出發の前夜光君に遺した訓諭左記の如き如何なる人が何度讀んでも泣かずには居られない、それは文章じやない強い〳〵誠心の力である、吾人は御互に此誠心を勵み田中支隊の名譽の光榮を分つと共に其責任を感じ專念努力せねばならぬ、それが御國への義務であり又死者に對する無上の回向である。

父は行くなり西比利亞に大君に捧げし此身は明五日午前九時十分大分驛發汽車にて西比利亞に向ふなり此時に於て汝光に嚴に敎へ示すこと左の如し

一、母の命令は常に遵守し直に之を實行すべし

一、專心一意學業に努力すべし

一、十分の運動を爲し體力氣力を鍛練すべし

一、友と交るには其人を撰ぶべし

一、前記の各項を實行して成長し忠君愛國の充滿せる日本男子となるべし

右敎示す

彼の楠正行は年僅かに十三歲の時に於て父君より敎へ訓されたる事を實行したるが故に日本第一の忠孝と稱せらるゝに至れり汝年將に十三歲父の最後の敎へを遵奉すべし

大正七年十二月四日午後十一時五十分書終

父　俊秀

愛兒　光君

田中支隊三週忌雑詠

陸軍歩兵大佐　田所成恭

幾夜をかいをねで泣きし如月の頃はめぐりてまたも來にけり
國のためたふれし友のおもかげを志手の岡べに偲ぶ今日かな
つく〳〵と筑紫の空をながめつゝ去年の今宵をしのびける哉
雉子鳴けば思ひぞ出づる雉野塚吹雪にむせぶこがらしのこゑ
天かける友の御魂かさりかねてたゝづむ空に鳴くほとゝぎす
三年をば早や過ぬれどしばしだに忘れかぬるは友のおもかげ
又してもはかなく夢に見ゆるかな今は世になき君と知りつゝ
さめて又なげきまさるをいかなればかくも屢々夢に見るらむ
紅に朽ちはてぬらむ三とせへてなみだひめにし妹がたもとは
今更にむかし偲びてこよひまた妹がまくらやいかにひづらむ
いづくにと父を戀ふまで生ひたちぬあはれ遺し、忘がたみは
國民はおほし育てむ君やゆめこゝろのこしそわすれがたみに
老が身の獨のこりて去にし兒のいさをにやすく世を渡るなり
うらやすく世を渡れども老が身は人知れずこそ袖やしぼらめ
つく〳〵と君が上こそ偲ばるれ在て甲斐なくながらふる身は
夜もすがらかたみに君と語らひつ死なば共にと契りしものを
しばしだに忘れかねけりいかばかり慕へど還る君ならなくに
きゞす鳴く雉野のはらの夕煙いくとせありて消ゆらむものか
けふばかり人なとかめそふりいでゝ翁も泣かむわれも妻子も
たぐひなき君がいさをは天地のあらんかぎりに語りつぎてむ

（二月廿五六日於駒澤）

大正十二年四月二十六日印刷
大正十二年四月三十日發行

定價金貳拾五錢

編輯兼發行者　大阪市南區天王寺大道三丁目四二二五　藪野重太郎
印刷者　大阪市南區西賑町一番地　吉村勝次郎
印刷所　大阪市南區西賑町一番地　浪速印刷株式會社

發行所　大阪市南區天王寺大道三丁目四二二五　軍人遺族救濟會

397
459

終